

# 斎藤いくまを国会へ!

2017年10月5日  
No.495

Tel 03-3651-4861  
mail\_cn001@zengakuren.jp  
http://www.zengakuren.jp/

全学連(斎藤郁真委員長) 書記局通信

## 10/2国賠第3回口頭弁論

### 斎藤委員長が堂々意見陳述!

10月2日、東京地裁民事第31部(小野寺真也裁判長)で、公安警察による昨年9月の全学連大会襲撃・国家賠償請求訴訟(第3回口頭弁論)が行われました。

「(大会当日に)公安警察が撮影したビデオカメラの映像をすべて出せ!」——これが今回の裁判の焦点でした。被告である公安警察と東京都は、当日の動画の存在を認めつつも、提出を頑なに拒否しています。大会襲撃を「正当な視察活動」と居直っておきながら、提出拒否の理由については、「警視庁との兼ね合いがあるので言えない」(被告側代理人弁護士)と逃げ回る始末。森友—加計学園問題同様、国家権力にとって都合の悪い証拠はすべて隠ぺいする。まさに国家犯罪です!

「なぜ映像を出せないのか!」——原告と弁護団が激しく追及し、公安警察の主張のでたらめさが完全に暴かれ、裁判長が被告・原告双方に映像提出を求めました。公安警察と東京都は、11月末に「提出拒否理由を書面で提出する」と言っています。公安警察のビデオカメラ映像にこそ、真実があります。次回の裁判は来年1月16日(15時開廷)です。裁判傍聴への結集をよろしくお願ひします! (全学連救対部・洞口朋子)



#### ▼斎藤いくま全学連委員長の意見陳述(抜粋)

被告である東京都・公安警察は私たちが公安警察・司法権力に敵対的であるとしていますが、それ以前に公安警察の側こそ私たちに敵意を持って弾圧に臨み、違法な公権力の行使に手を染めたことをただちに認めるべきです。

そもそも、私たちの主張に対してかなり具体的な反論をしておきながら、その反論の根拠となった映像データを出さないとは、一体どういうことでしょうか。

公平・公正を旨とする裁判において、「自らの主張の根拠を説明しなくてよい」と被告は主張しているわけです。このような反論の仕方が裁判で認められうると考えている東京都・公安警察の態度こそ裁判所・現行の法制度に対する重大な侮辱です。なぜなら、被告は現行制度に対して堂々と正面から抗議の意志を示し、変更を求めるわけでもなく、裁判そのものの腐敗・墮落を求めることによって自らの主張を通そうとしているからです。権力者の言うことは根拠などなくても認められ



るべきだという姿勢を裁判所にも求めているからです。原告である私たち以上に、裁判所こそこのような被告の態度を許すべきではありません。

実際、被告の主張はまったく誠実ではありません。被告は反論では「職務質問の一環であり適法」だと主張しています。そうであるならば、今年の全学連大会でも同様の行動をとるつもりだろうと私は考え、参加者に相応の構えをしてもらうよう呼びかけました。

しかし、今年の全学連大会では公安警察はビデオ撮影すらしませんでした。東京都・公安警察は去年の全学連大会における自らの行動を裁判では適法だと主張しながら、実はうしろめたく思っているわけです。本当にふざけた態度です。

思えば、このような被告の態度はこの国に溢れかえっています。たとえば、日本で生きていくとよく聞く常識、「左派的な政治活動をする」と就職に不利になるとか「組合活動をする」と解雇される。これはまぎれもなく思想・信条の自由や団結権など憲法上の権利に対する違反です。しかしこの憲法違反がこの国の常識なわけです。ふだん「法の統治」「民主主義」が日本にあることを他国を批判する理由にしている連中ほどこういう違法を黙認します。社会制度のより大きな正義の実現へ努力するのではなく、制度の腐敗を求める態度はこの国に広がる深刻な病のひとつでしょう。そして、この病を広げる勢力のなかに東京都・警視庁公安部がいることが改めてこの裁判で証明されました。若者の政治不信や無気力を嘆く前に、汚い大人が信用されると思っている自らの愚かさに気づいて欲しいところです。

私は、今回の解散・総選挙において全学連を代表して東京8区・杉並区より立候補します。今のこの社会のあり方が「民主主義」であり、それが朝鮮戦争・核戦争を始める理由だというならば、そんな「民主主義」は滅ぶべきです。腐ったミカンも捨てるべきであって、守る義務などありません。この国に必要なのは革命です。

法律・制度…、過去から受け継がれたあらゆるものを活かしているのは今を生きる人間です。裁判所は客観的にみればただのコンクリートの塊です。それを裁判所にしているのはここで働く人々の努力です。政治家がいかに偉そうに政治の力を語ろうと、社会を動かしてきたのは連綿と今も続く人々の労働です。にもかかわらず、その労働があまりにも低く扱われている。この国を動かしてきた主人公たちが、今こそこの国をつくりかえるべきだ。私は、自らの一歩、この選挙を通して「新しい労働者の政党」をつくらうと思います。

戦争のための「民主主義」、過労死と低賃金を多くの労働者に強制する「民主主義」、屈服と腐敗で成り立つ今の

秩序を守ることを仕事とする公安警察や利権集団が私たちを敵視するのは当然でしょうが、さしあたってここは法廷です。裁判長が利権集団に属しているのか私は知りませんが、違法な公権力の行使に対し、裁判所として公平・公正な法の裁きを下すことを求めます。

## ★首都圏学生の斎藤委員長応援メッセージ!

「死は救済」という言葉をTwitterなんかでよく目にすると思う。大学出なけりゃ「まともな」職はないと言われ、しかし大学は出たけれど税金年金社会保険おまけに奨学金の返済に追われるらしい。結婚して子供を授かる金なんて稼げなければ出産育児で休めば奨学金を買い、しかし産まなければそれでまた非難される。果てはブラック企業のサービス残業ユーレイ出勤、最後には過労死が待っている。生き延びたとしても「老人活用」であるし、払った金は返ってこないらしい。ああ、生き地獄とはまさにこのことである。日本の地獄は自慢の地獄、罪がなくてもお・も・て・な・し。ちょっと前まで過労死を「ワーキングポア」と言う人がいたが、近くこれもグルの救済だと喜べる日が来るのかもしれない。ただでさえ、とかくこの世は住みにくいというのに、生まれた時代はこんな陰鬱な時代である。死ぬか？と言っても果てるような気概はなく、陰鬱とした日々を送っている。

そんな私にとって斎藤いくまの出馬はひとつの小さな希望である。いまや春になっても電車が止まることもなく、ましてやインドや韓国みたいなゼネストが起こることも、兵隊にとられて「丸山真男をひっぱたく」ことができたり、あるいは「戦争を内乱に転化」するような事態はすぐには起こらないだろう。そんな中で選挙情勢、小さな楽しみなんて中核派・斎藤いくまが選挙をかき乱すことぐらいしかないだろう。あなたもそうは思わないか。別に「ゼネストで日本革命を完遂して世界革命を～」なんて部分は信じなくていいと思う。ただ「若者の代表」といっしょにどんちゃん騒ぎ立てて、あわよくば私たちの権利自由を獲得する。それでいいと私は思っている。

たぶん進まば極楽退くは地獄、とはいかない。どっちに進んでも地獄。じゃあちょっとでも楽しい方を選びたい。みんなで楽しい地獄に進もうではないか。斎藤を応援するでも、斎藤のマイクを奪って好きなことあれこれ叫ぶでも、斎藤をやじりたおすでも良からう。選挙のときくらいしかそんなことできないじゃない。

きっと斎藤いくまと愉快的仲間たちが、物も言えない地獄から法大や京大のような楽しい地獄に導いてくれよう。地獄への案内人斎藤いくまを押し立てよう！（M）